



聖歌集改訂ニュース

『改訂古今聖歌集試用版』使用の意味

『改訂古今聖歌集試用版』が発行されて丁度2年経ちました。広く諸教会で使われていることをありがたく思います。この試用版はとてつもなく大変な代物であることをご存知ですか？今使っている『古今聖歌集』(以下現行と呼びますね)と非常に大きい違いがあるのです。その点が重要なのです。つまり、ついこの間から変わってきたわたしたちの信仰のあり方に関連しているのです。

イエス様が一番重要な戒めとして、「神を愛すること、他人を愛すること」を挙げましたね。ということは、聖歌の中ではこの二つが歌えるようになっていなければなりません。ところが現行には神を愛する聖歌はたくさんありますが、他者を自分のように愛するという聖歌が無いのです。これは大変なことですね。それで試用版には2111番「新しいこの掟」その他を入れました。

神様はわたしたちを超えて高いところにおられると同時に、私たちの中にもおられます。この、人類、わたしたちと共におられる神ということが、しばらく前から大切に考えられてきました。それで聖餐式の祭壇も会衆の中に来て対面式になったのです。試用版はこの重要な変化を歌う聖歌を収めました。たとえば2044番「生きている主イエス」です。

現行には、わたしたち個人個人がたいへん罪深い存在である、ということを書いてある聖歌が満ちています。しかし全人類は、主イ

エス・キリストの地上の生涯、十字架、復活によって、神との壊れていた関係が修復され、新しく造り直されたのです。

罪深さを嘆くことは大切ですが、そこで終っては福音ではありません。わたしたちは救われたことを「感謝」し、顔を上げ、明るく前進していきます。祈り書もそれを回復し、特に聖餐式は「感謝の礼拝」であることが強調されました。そのためにリズム感のあふれた、あるいは元気に満ちた聖歌が必要不可欠なわけです。2002番、2046番、2087番、など多くのものが入られました。

現行の信仰理解はたいへん個人的です。「わたしと神様」という内容が多いのです。もちろんこのことは大切ですが、キリスト教信仰はまず「わたしたちと神様」という事柄が重要であって、その中で初めて「わたしと神様」が考えられるのです。教会の共同体意識とでも言いましょうか。試用版を見てください。ぐっとその辺が増えているでしょう？

神はキリストによって、世界をご自身と和解させてくださいました。この世界は神様の支配の下にあります。教会はそのことのあるしでもありません。しかし、まだ目に見える形でそのことは現されていません。それはキリストが再び来られる日、世界の完成の日、喜びの日まで待たねばなりません。その間いろいろの悪、苦難がこの世にはあり続けます。神は、この世界が御心にかなうように働いてお

られます。教会は、人間として喜びの生を送るために作られていながら、いまだそうっていない人々、弱くされた人々が喜んで生きられるように、働く責任を持っています。

つまりこの世界は、神の愛の対象であるということです。現行では、世界は悪霊の支配する暗い所、早くそこから抜けて教会という救いの聖なる場所に入るように、という聖歌が多いのですが、現在の宣教の考え方は変わってきました。正義と平和の問題、神が造られた人間を含めすべてのもの、つまり全被造物を良い状態に戻すこと、すべての物の分配...、キリスト者の責任という課題がいろいろありますね。

「すべての物の分配」を例として考えてみましょう。おもしろいことに収穫感謝の聖歌を比べると良く分かります。現行の284番は、神様が育てた果実を感謝しなさげるといふものですが、試用版ではその上にさらに神様がくださったものを、全世界の人々と分け合うことの重要性を歌います。2051番他。これはすでに祈祷書の収穫感謝の祈りの中に表現されています(256 - 257ページ)。

この他、1960年代から大きく変わってきたわたしたちのあり方はいろいろありますが、今回はこれくらいにしておきましょう。まず試用版の言葉に注目してください。そして初めから読んでください。今のわたしたちにふさわしい聖歌が溢れていることに気づかれるでしょう。つまり、試用版を通過しないで新しい本格版古今聖歌集はありえないのです。まだ不十分なものではありませんが、試用版の精神は本格版の核そのものであると言えます。その意味で現代の宣教の記念碑的試用版を、どなたも手にとってお使いくださるよう、心からお薦めいたします。

(主教 フランシス 森 紀旦)

第9回礼拝音楽担当者会

10月17～18日

九州教区熊本聖三一教会にて開催

今年も担当者会は主教様はじめ皆様の歓迎を受け、暖かい雰囲気の中で行なわれました。準備を下さった九州の担当者、会場を提供して下さった教会の方々に感謝いたします。

今回は全教区からの参加があったこと、また、閉会後に、九州教区各地の信徒の方々とともに『新たな賛美を』の研修会をもてたことは、大きなことでした。

委員会では、例年の各教区・委員会の状況報告、試用版出版後の改訂聖歌、新しい聖歌の紹介と共に、聖歌の選び方や歌の練習など礼拝の準備を重視しましたが、時間的に余裕のない部分もあったことが、反省点でした。

一日目の最後に、昨年お出しした訳詩の宿題を分かち合いました。出題の2曲(アイオナ共同体作)には、今までより参加教区も多く、どれも味わいのある力作ぞろいでした。一緒に歌うことから、訳詩に関わった方たちは、“聖歌になっていく”ことを実感なさったと思います。礼拝の中で、ある意図をもって歌うことにより、さらに聖歌としてその役目を発揮していきます。

これらは委員会でその聖歌の強調点などを確認し、訳詩者の方々とやりとりをしながら作業を進めて頂きます。

各教区の宿題の取り組みが、今後の改訂作業に繋がることは嬉しいことです。担当者の皆さんを中心にして、改訂委員会が全教区、全信徒に支えられている思いを新たに強くしました。

(文責 加藤啓子)

改訂委員会って、いま、何しているの？**- 改訂作業の進捗状況 -**

『改訂古今聖歌集試用版』が2001年11月に出版され、そのガイドブック『心は賛美に満ちて』が翌年5月に出版。また、9月には『別冊・礼拝式文用曲譜・朝夕の礼拝』が配布されました。その後の当委員会における作業の進捗状況についてお知らせします。

【古今聖歌集の各聖歌の改訂】

その第一の作業として、現段階で多くの時間を割いているのは、「古今聖歌集」に収められている各聖歌の改訂です。1994年12月から96年2月にかけて行った全聖歌の評価(ガイドブック198頁以下に「評価チャート」が掲載されています)をもとにして、改めてこの時期にその再評価をしています。過去の評価時には「削除」つまり、「次の聖歌集には収めない」としていた聖歌をまず再点検し、残すことになったものも幾つもあります。今回の添付楽譜で言えば、115番、339番、388番のように、詩を改訳して残すもの、また112番のように詩だけではなく曲も新しい組み合わせにして残すものもあります。さらには、「削除」評価を受けていたけれども、まったく改変せずに残すものもあります。371番「主われを愛す」や、476番「この世のなみかぜさわぎ」などがそうです。クリスマスの聖歌36番、37番も、「削除」評価から、まったく改変しないで残すことになります。

このような再評価と改訂を経た後、本格改訂版聖歌集には、おおよそ250～300曲が、「古今聖歌集」から引き継がれる見込みです。現段階で、「古今聖歌集」の約130曲が改訂作業を終え、90曲ほどが作業中です。改訂作業

は、原詩を逐語訳し、既存の訳詩と見合わせながら確認、または改訳詩して、仮楽譜におこしてからそれを承認する、という段階を経ています。改訳詩を施しながらも、既存の訳詩に戻すこともしばしばありますし、さらには訳詩までしたところで、結局「削除」とするものもあります。いずれにしても、一つの一つの聖歌への畏敬と愛情をもって、時間をかけて向き合っています。

【増補版の聖歌の改訂】

第二の作業は、『古今聖歌集増補版95』の聖歌の改訂です。これは既に再評価を終え、約半数が、改訂を施した上で引き継がれることとなります。現在は、改訳や編曲の作業が進められています。

【翻訳聖歌】

第三の作業は、諸外国の聖歌集からの翻訳聖歌です。“ヒム・エクスプロージョン”と呼ばれる20世紀聖歌量産期に生まれた歌には、教会の礼拝に新しい(けれど伝統の上に立った)賛美をもたらすものが、数多く発見されます。今、そしてこれからの時代に生きる教会の祈り、賛美、宣教を見据えて、心躍らせながら作業を進めています。

添付楽譜には翻訳聖歌を2曲収めました。本格版には、少なくとも150曲は翻訳聖歌を入れられるようにと尽力しています。

【新作聖歌】

翻訳聖歌と共に、日本語によって新たに創作された聖歌も採り入れていくつもりです。すでに様々な形で、新しい聖歌が今も各地で生まれています。聖歌を作る、自分たちの言葉で、自分たちの賛美の歌をつむいでいくことを、特に教役者の方々に奮起していただきたいと願っています。「自分の説教に見合う、

こんな内容の聖歌が必要だ」という発想から、ぜひ創作聖歌にチャレンジしてみてください。教会の創立記念日などの折に、新しい聖歌を教会で作ってみる、なんていかがでしょう。

【2006年出版への見通し】

以上のような作業の他に、『試用版』の各聖歌の評価と改訂も必要です。さらに「礼拝式文用曲譜」を整備する必要があり、これも聖餐式の曲譜をはじめとして、かなりの分量になることが予想されます。式文用曲譜についての見通しは、次号以降に送ります。

本格改訂版聖歌集は、2006年5月の総会に提出し、承認を受けなければなりません。それから最終校正、そして印刷・発行となります。年を明けてからの丸二年、集中的で地道な作業が待ち受けています。出来るだけ多くの方々のご協力が必要です。よろしく願います。(文責:宮崎光)

添付楽譜について

『古今聖歌集(1959年版)』に収録された聖歌の改訂版

21-B 人にはみ恵み 地にはやすき (降誕節)

古今聖歌集第21番と同じ詩を別な曲で歌います。英国においては、この曲(NOEL)との組み合わせで親しまれており、米国では第21番の曲(CAROL)との組み合わせが有名です。どちらの曲も美しく、改訂聖歌集には双方を収めます。

今回の改訂詩では、まず2節の「なやむひな(鄙)」の意味を明解にしました。「ひな」とは、「都を離れた鄙(ひな)びた地」のことで、「なやむ里」と改訂しました。また4節で、「世々

のひじりら」を「聖なる人らの」と、「おおきみ」を「キリスト」と、それぞれ改めました。1節は「あれとうとう」を「世々にあれと」と変えて、詩をより自然に響きかせつつ、天使の賛美の広がりを表現しています。

23 ああベツレヘムよ (降誕節)

米国で生まれた、見事なまでに美しいクリスマスの聖歌です。

米国聖公会司祭ブルックス(1835-1893)が、1865年の降誕日前夜、エルサレム聖誕教会の礼拝に参加した折からこの詩を着想し、1868年のクリスマスにフィラデルフィアの教会で初めて歌われました。後に、米国聖公会の日曜学校聖歌集に収録され、英国へも紹介されました。その際に、『English Hymnal』ではFOREST GREEN(古今24番)という曲に載せて収録されました。

詩は極力改変せず、1節の「ほしのみにおいて」は、意味がとりにくい部分でもありましたが、そのままにしました。「におう(匂う)」という言葉には、「色が美しく映える」という意味があります。(「ニホフ」の、「ニ」は、もとは「丹」で赤い色。「ホ」は「秀」の意で際立つことだと伝えられています。)つまり、星の輝きだけが際立つほどの静けさを、冒頭で表現しているのです。

4節は、既存の訳が原詩から多少乖離していることを改め、忠実に訳出するべく、かつ「イマヌエル(神はわたしたちとともに)」という言葉を含めて改訂しました。

24 ああベツレヘムよ (降誕節)

『古今』では、23番と24番は、原詩は同じでありながら、訳詩は異なっていましたが、今回は、両者同じ訳詩で収めます。この曲は英国民謡で、ヴォーン・ウィリアムスが、1903年12月にForest Green在住のガーマン氏が歌っ

ている旋律を聞き取って編曲し、世に知られるようになりました。

46 日のてるかぎりは (宣教)

18世紀英国創作聖歌における巨匠アイザック・ワッツによるこの詩は、詩編72編「王が太陽と共に永らえ 月のある限り、代々に永らえますように」(5節)をモチーフにして、神の治められる世に対する人類の賛美と祈りが、壮大なスケールを持って歌われます。

『古今(1959年版)』では「顕現節」の聖歌として置かれていますが、それ以前の『古今(1922年版)』には、副項目に「神の救 普く及ぶ」と記されており、年間を通じて歌いやすい位置(「宣教」の項目)に置くことにしました。

今回の改訂では、3節以降を全面的に改訳しています。「おさなごたちの声はみ名をもって祝福を宣言し、捕らわれ人たちはその鎖から解放されて喜び踊り、あらゆる被造物は賛美をささげ、天使たちと共に地上は『アーメン』を高らかに繰り返す」という原詩の内容をちりばめて訳出しました。

48 主よ くるがねの (神の国・神の家族)

現行の教会暦には見られない「大斎前節」という項目に置かれていたこの歌は、従来の訳詩では、悪の誘いに打ち克つことに強調点がありましたが、原詩はその初行に“Thy kingdom come, O God,”とあるように、主のみ国の到来(終末)を待望する心を歌った内容です。1節にある「鉄(くるがね)の杖」とは、ヨハネの黙示録19章15節に「自ら鉄の杖で彼らを治める」との言葉からとられています。世の終わりの新しいエルサレム、神の国の完成を強調しています。その意味で、降臨節(アドヴェント)にも適しているでしょう。5節の「明けの明星」(Morning Star)とは、救い主

(キリスト)を象徴した言葉です。

71 十字架をとり (大斎節)

『古今』では、しばしば「十字架」を三音に譜割りして「じゅ・じ・か」と歌ってきましたが、改訂版聖歌においては、「じゅ・う・じ・か」と四音に収めるように努めています。この第71番の改訂は、その点を微調整しました。それによって、ミーター(曲譜韻律)が「6686」から「7686」に変わり、全節とも一語ずつ増え、特に助詞を入れることが可能となり、より日本語としての意味がわかりやすくなりました。

81 とげにて刺されし (大斎節・聖週)

比較的近年の作(1930年)であるこの詩には、シンプルな言葉をもって、主イエスの十字架における苦難の様が視覚的に表現され、そこに想起される信仰者の自己奉獻の決意が歌われています。そこで、新しい訳詩を施し、組み合わせる曲も変更しました。

1節は茨のとげに傷む主のみ頭を、2節と3節は、釘打たれた主のみ手、み足を、4節は槍にて突かれた主の脇腹を、それぞれ定形的に訳出しています。大斎節・聖週の礼拝や黙想にふさわしい聖歌として、装いも新たになりました。

87 惑わす者の (大斎節・聖週)

この改訂訳は、『古今』221番第二譜と同曲(J. S. バッハ作)との組み合わせによって、より深みと力のある聖歌として生まれ変わりました。

「暗闇に包まれたゲッセマネに進み行き、主の苦しみの時間を共にして、そこから目を背けずに、主の姿に倣え」と、力の込められた内容です。1節でゲッセマネ、2節でピラトの裁判、3節でゴルゴタと、その受難の経緯も明解な構成でつづられます。

改訂訳では、「サタナ」という表現をやめ、「惑わす者」という言葉を用いました。また、3節に表れる主の十字架上の言葉は、従来訳では「こと終わりぬ」でしたが、ヨハネによる福音書19章30節の新共同訳に従って、「成し遂げられた」という表現を採りました。

100 ほろぶるものを (復活節)

復活節には必ず歌われるこの有名な聖歌は、ラテン語原詩においても、また英訳詩においても、一文節毎に「ハレルヤ」が歌われていました。それゆえに、当初の改訂作業においては、毎節毎行「ハレルヤ」を入れる形(第4節のような)で進められていました。しかし、愛唱されてきた訳詩の豊かさを、縮小・矮小化させることになるのを避けて、既存の訳に若干の手を入れたのみの改訂としました。

103 よろこびうたえ (復活節)

8世紀に書かれたギリシャ語の聖歌で、出エジプト記15章の「海の歌」を土台として始まり、続いてキリストの復活が歌われます。「今は魂の春である」「長く、暗い罪の冬のすべては過ぎ去った」と、季節の表現をもってキリストの復活をたたえる詩的な内容が盛り込まれています。

106 救いの主は (復活節)

これは実は、『古今』100番と同じラテン語聖歌です。100番では採り入れなかった、文節毎の「ハレルヤ」を生かして、従来訳を微調整しました。変わったところは、僅かに3節「われはいやさる」を「われらいやされ」としたのみです。

112 高らかに歌え (復活節)

「サレムのたたえに」という歌いだしによって、短調で荘厳な第一譜、単旋律聖歌の第二譜が、『古今』に収められていましたが、

いずれも音楽的な難しさと詩の内容との適合性から、全面的な改訂を施しました。

曲は、英国聖歌らしさの溢れる、清らかで荘重なものです。5節は三位一体の神への賛美の内容でもあるゆえに、この曲のオリジナルとも思える「ハレルヤ アーメン」が加えられています。なお、「ユダ族の獅子」という、ヨハネの黙示録(5:5)に見られるキリストの象徴語が、2節において用いられています。

115 いばらにて編みし (復活節・昇天日)

『古今』にこんな快活な聖歌があったのか、と驚くような一篇です。内容にも神学的深さがあります。罪と苦痛と恥辱のしるしである茨の冠が、真の王の輝く冠であることを歌い、徹底して十字架の栄光と勝利を宣言しています。

作詩のトマス・ケリ(1769-1854)は、アイルランドのダブリン生まれで、1792年に英国聖公会の聖職となりますが、その説教がメソヂスト的で過激であると、ダブリン大主教から説教を禁じられました。しかし、さらに市外の聖別されていない建造物で説教を続け、自ら英国聖公会を脱会しました。その後も礼拝・説教を続け、765編の聖歌を創作しました。

117-2 たたえよこの日(復活節・昇天日)

106番と同様、「ハレルヤ」を行毎に繰り返すこの聖歌は、『古今(1922年版)』では、6節まであり(『古今(1959年版)』では、4節もの)、今回の改訂では再び6節ものにしました。天に昇られたキリストが、罪をあがない、天国の扉を開かれ、そして、地にある民を愛して止まぬキリストが、わたしたちのために場所を用意しに行かれた(ヨハネ14:3)ことを

賛美します。

119 神のみ子なる (復活節・昇天日)

4節までは、僅かな改変です。5節は、「(よみよりわれを)すくい活かして」を、「みちびきいだし」としました。続く「みくらのまえにたたすために」は、審きの座につかせることを思わせられるので、「天なる国に迎えるために」としました。とりなし主なるキリストが、「今はみ父の右に」おられるのは最後の審判のためではなく、すべての者を天の住まいへと導き、迎えるためであるという、強調点の変化が反映されています。

120 いばらのかむりを (復活節・昇天日)

2節「イエスキミ」を「キリスト」に、3節「きみの」を「み子の」に、微調整しました。「君(きみ)」は、元来は同等、ないしは目下の者に対する言葉でありましたが、一方で君主や貴人を指す意味もあります。イエスを「きみ」と歌った最初は、明治期のごく初期のプロテスタント牧師で賛美歌を創作した奥野昌綱(1823-1910)であったと伝えられます。以来、聖歌にはしばしば「わがきみ」や「イエスキミ」という言葉がありますが、改訂においては必要以外は極力「きみ」という表現を避けるようにしています。

177 大空に満つ (朝の礼拝)

1節のみ改訳しました。「義の太陽」(マラキ3:20)や、「光」「栄光」といった、神・キリストを表象する言葉が盛り込まれ、朝の礼拝に輝き溢れるイメージをもたらししています。2,3節は原詩の内容を詩的に集約した名訳です。

339 裏切り者 おまえは (大斎節・聖週)

アフリカ系アメリカ人の霊歌の中でも、最も広く親しまれているものの一つ WERE YOU THERE を、思いっきり大胆に改訳しました。

「Were you there」は確かに「あなたはそこにいたか」という意味ですが、「見たか」とか「いたか」のように観察者、傍観者にとらえるよりも、積極的にそのことに関わった、罪に対して責任を負う者としてとらえる方が、この霊歌の思いに近いのでは、と訳詩者は感じて、「裏切り者おまえは」としました。

大斎節・聖週にこれを歌うと、身震いするような罪の責任に対する思いを突きつけられることでしょう。

388 救い主よ わが罪をば (信仰)

従来訳詩の言葉を継承しつつ、新しく訳し直しました。1節は前半を新しく訳し、後半は従来訳の2節の後半部をつなぎました。2節には、従来訳の3節を繰り上げて、さらに1922年版の『古今』に用いられた「いともあつき」という言葉を2節冒頭に置きました。3節は、原詩に忠実に新しく訳出しています。最終節は、平易な言葉に置き換えています。

米国会衆派牧師のレイ・パルマー(1808-1887)が、個人的な瞑想において書かれた詩で、彼自身は聖歌として歌われるとは思っていませんでした。ボストンで出会ったローウェル・メイソンの作曲によって発表され、この聖歌は爆発的に広まりました。

390 世にまししときの (イエスの地上の生涯)

従来訳詩に、「不快語」があるために歌うのがはばかれながらも、その曲は多くの人に愛され、改訂訳が待望されていた一遍です。問題の2節を改訂しただけではなく、全体を調整しました。ナザレでの生活を見ずとも、奇跡やいやしのみわざを見ずとも、十字架の苦しみを見ずとも、昇天を見ずとも、わたしたちはイエスを神の子と、そしてイエスのみ業を、主の死と復活、昇天を、疑うことなく信

じる、という告白が歌われています。

466 愛のみ誓いの (信仰生活)

「恵みの雨 SHOWERS OF BLESSING」と名付けられたこの聖歌の原詩は、全部で5節ありました。既存の訳詩は、全体の意味を詩的に網羅している名訳でもありますので、その雰囲気を生かして、1節は改変せずに収めました。2節以降は、詩的な雰囲気を重んじながら、思い切って改変しています。「谷や丘を越えて、豊かな雨の音が、貴いいのちを呼び起こす」という詩の内容から、水の音を聴く心を促す言葉を置きました。3節は、原詩3,4節の言葉を網羅して訳出し、最終節においては、「恵みの雨は、わたしたちが信頼と服従の道を行くときに、心身を爽やかにする季節とともにめぐり来る」という内容を歌っています。

「恵みがシャワー(雨)のように、いっぱい満ちるほどに降りかかる」という、神の大いなる恵みの喜びと感動が、全節を通して歌われています。

翻訳聖歌

3001 山々きざみて (神)

米国聖公会聖歌集増補版“Wonder Love and Praise, 1997”第746番です。原詩には、「山々の彫刻家」「天の宝石細工人」「海を裂く人」という創造性豊かな表現で神を賛美し、さらに主イエスに対して「机をひっくり返す預言者」という類を見ない表現も見られます。

自然の表象によって神の属性を表しつつ、私たちとの関係を表現して、「あなたは胎～私たちは形のないもの」「あなたは門～私たちは目に見えない」「あなたは主人～私たちは飢えている」「あなたは存在～私たちは捜し求める」と、原詩は歌います。非常に神学的洞察に満ちた内容で、全体として三位一体なる神についての聖歌です。3節は、幼子なる神と、

あらゆる瞬間に存在する聖霊なる神を示して、4節において、終わりの時の刈り入れをする神と、現在の私たちの生活との関係性にも思いを寄せています。

この曲は、1988年にヒューストンで開催される米国オーガニスト協会全国大会の際に、キングスカレッジ聖歌隊によって歌われるアンセムとして依頼されたものです。テンポは二部音符 = 60 程度です。

3002 神はともにいます (召命と旅)

3001番と同様、米国聖公会聖歌集増補版に収められました(第801番)。ワシントンDCの第一会衆派教会牧師であり、ハウエル大学学長であったランキンが、“Goodbye”のキリスト教的語源“God be with ye”から、この別れの聖歌を書きました。ローマの信徒への手紙16章20節の「わたしたちの主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように」を引用しています。集会の終わりや派遣の聖歌としてもふさわしく用いられます。

詩の内容は、個人的に心から愛する者を思う気持を表現しており、以前はこの詩に、弱々しく、センチメンタルな旋律が充てられていましたが、ヴォーン・ウィリアムスによる、シンプルで品格ある旋律によって、直接語りかけられるように歌われました。

堂々としていて、且つめりはりのある雰囲気を大切に、二部音符54～60程度の速さで弾いてください。尚、ユニゾン、ハーモニーの指示は、作曲者自身の書き込みです。

なお昨年、配付しました古今18と20番を再度添付しました。

発行：聖歌集改訂委員会

ご意見・ご質問は日本聖公会管区事務所まで

〒162-0805 東京都新宿区矢来町65

TEL 03-5228-3171 FAX 03-5228-3175

hymnal.po@nssk.org

http://nssk.org/hymn/